



特別寄稿

## たのしいどくしょのじかん

物質工学科 宮下美晴

今の私の愛読書はと言えば、「ももたろう」と「さるかにばなし」と「おおかみとしちひきのこやぎ」である。要するに、息子に読んで聞かせるための絵本のことである。2歳に満たない我が息子は、近頃やたらと絵本がお気に入りのようだ。休日ともなると、精一杯背伸びをして3冊の絵本を本棚から引っ張り出し、私のところに持ってきて「読め、読め」とせがんでくる。このあいだの日曜日には「ももたろう」を4回、ほかの2冊を3回ずつ読まされた。乳幼児向けの絵本であるから、話のエッセンスだけを抜き出した内容になっており、1冊はわずか8ページしかない。何度も繰り返し読むうちに、私はすでに一言一句覚えてしまった。それでも息子は、いつだって目を輝かせながら絵本を見つめている。「むかーしむかし、あるところに…」と話しながら、この絵本の何がそんなに彼の心を惹きつけるのだろうかと思案するのだが、「いいものはいいんだ」と言わんばかりの満足そうな彼を見ると、これこそが本の魅力の一つなのだ、と妙に納得してしまうことしきりである。

思えば私は子供の頃、当時住んでいた家の近所にあった公立図書館によく通った。いや、母親に連れて行かれたと言った方が正しいか。今となって考えると、決して裕福ではなかった我が家において、お金をかけずに時間を潰せ、しかも読み書きの練習にもなるとあっては、図書館ほど重宝なものは他になかったのかもしれない。ともあれ、小学校に入学する前であったが毎週必ず図書館に行って本を読み、さらに何冊かを借りてきたものだ。もちろん漢字などわかるわけがないのだから、借りてくる本と言えば童話や昔話といった類の絵本に限られていた。特にお気に入りの絵本は、返却してもまたすぐに借りて、何度も繰り返し読んでいたような気がする。なーんだ、なんのことはない、我が息子は30年ほど前の

私と似たり寄ったりだったのだ。

三つ子の魂なんとやらののか、そもそも私は本を読むことは好きである。けれど「趣味は読書です」と公言できるほど読みあさっているわけではない。何しろこの数年は、専門書を除けば出張時に新幹線の中で短編小説を読むくらいで、あとはせいぜい講談社ブルーバックスがいいところだ。そんな状況だったから、最近になって訪れた息子との読書の時間は、きわめて貴重であり且つ楽しい。たかが童話とバカにする事なかれ、大人になって読み返してみても、これがけっこう面白い（正直なところ少々飽きてはきたが）。解説によると「さるかにばなし」は正義と友情を、「おおかみとしちひきのこやぎ」は親子の愛情と嫉を描いた物語だそうだ。なるほどその通りと思う節も確かにあるが、実際のところそこまで深読みする必要もなからう。それよりも、童心に戻ってただ純粹に物語としての面白さを受け入れればよいのではないかと思う。

無論、いい大人になった今、童話や絵本ばかり読んでいればよいと思っているわけではない。名作と言われる文学作品に触れ、自己の世界観・人間観・自然観を高揚させ、豊かな人間性を作り上げるための糧としていきたいという望みは持ち合わせているつもりだ。しかし、そんなことばかり考えて本を読むことに、いささかの堅苦しさを覚えることもあるだろう。だからこそ時には童話や絵本を読んで「本が好き」、「本を読むのは楽しい」という原点に回帰するのもいいものだ。息子との「たのしいどくしょのじかん」が教えてくれた気がする。

さて、次の日曜はどんな本を読もうか。とりあえず本屋さんに行って、新しい絵本を買ってこよう。「うらしまたろう」がいいかな、それともそろそろ「イソップどうわ」に挑戦してみようか。なんだか自分までウキウキしてきたぞ…。